

# 追憶の歲月 3人の恩師

まつもと 松本市長(長野県) **菅谷** すげのや **昭** あきら  
*Akira Sugenoya*



## 日野原重明先生の1つ

昭和37年の春、松本市にある信州大学医学部にささやかな望みと淡い期待を抱いて入学しました。以後6年間という長い学生生活を、豊かな自然環境に恵まれた松本市で過ごしました。

昭和43年3月、卒業するにあたり、患者さんから「あの医者に診てもらってよかった」と言われる臨床医になりたいという強い願望を抱き、信州をあとに上京し、聖路加国際病院にお世話になることになりました。

聖路加における医師研修生としての生活体験は、幸いにも日野原重明先生をはじめとする医療者のみならず人間としても尊敬できる優れた指導医や先輩たちに教えをいただき、併せて志を同じくする素晴らしき仲間たちにも恵まれ、3年間にわたる厳しくも楽しいレジデントの日々を送ることができました。

私はここでの研修生活の中で、日野原先生からいただいた臨床医の心構えとして次の2つの教訓が強く印象に残っています。その一つは「医のアート」という言葉であり、「人の心を動かす素晴らしい絵画や音楽は、遠くからでも、また多額の料金を払ってでも人々が集まってくる。医療も同じで、患者さんたちから選

ばれる本物の医療者になりなさい」との教え。2つ目は、「病者の目線に立った医療を心掛けなければいけない」と厳格に教え込まれたことは、現在、基礎自治体の長の立場にある私にとって、「病者を市民」に、そして「医療を行政」に置き換えて市政運営に努めていることにつながっているのではありません。いずれにしても若き日の聖路加での数々の経験は、その後の私の生き方にさまざまな影響を及ぼしていることは確かであります。

## 降旗力男先生のこと

聖路加病院での実り多き研修の後、私は母校に戻り外科学教室に入局し、外科医としてさらなる研修を重ねました。

専攻分野の決定に際しては幾つかの領域がありましたが、最終的には内分泌関係の外科臨床や研究の道に全精力を注ごうと決意しました。とりわけ私が甲状腺外科の専門医をめざしたのは、降旗力男教授の人間性に惹かれたことが大きな理由でありました。尊敬できる人が究めていた分野が甲状腺という臓器であったから、この先生なら間違いないという直感のようなものが働いたものと思っています。

先生は大変温厚で常に泰然<sup>たいぜん</sup>自若<sup>じじやく</sup>とされ、和をもって尊しとする方でありました。医局会でも声を荒らげたり人前で教室員を叱



日野原先生と歓談する筆者(右側)

責することも全くされませんでした。また手術に際しても穏やかな雰囲気の中で進められ、助手としても楽しく学ぶことができました。

教授はスポーツをこよなく愛されましたが、どちらかといえば苦勞話などあまり多くを語りませんでした。その師がある医学誌の巻頭言で「己の拠って立つところを深く掘れ」というタイトルで、自らの思いを述べていらしたことが妙に心の中に深く残っています。今となってはその内容の詳細については定かではありませんが、先生が

自ら選択した道を究めるための努力が綴られ、若き医学徒たちに向けた励ましの言葉が連なっていました。

わが恩師は病院長を経て医学部長に就任され、いずれは学長に就かれるものと言われていましたが、誠に残念なことに肝臓癌に倒れ、現職の学部長のまままで逝去され、このことは私にとってまさに痛恨の極みでありました。ただ甲状腺学を専門としていたことが、時を経て、チェルノブイリや福島原発事故へとつながっていくとは全く考えもしてませんでした。



降旗教授夫妻の仲人で結婚

## Prof. Robert Volpé

大学での診療、研究、教育に追われる年中無休の医局生活を送る中で、幸運にも自分が望んでいたカナダのトロント大学でのリサーチフェローとして、留学の道が開かれ希望の灯がともりました。

トロントでの留学生活は、数カ月間、当然のことながら肉体的にも精神的にも苦勞が絶えませんでした。しかし、ありがたいことに研究指導者や留学生仲間、研究助手の方々がやさしく面倒をみてくれ、少しずつ外国生活にも慣れてきました。なかでも一番救われたのは、トロント大学の内科教授であり研究室のボスであったRobert Volpé先生でありました。大変意欲的な方で、併せて陽気かつ大ようで常に前向きに取り組む姿に刺激を受けました。嬉しいことに先生は日本に対し大変な好意と関心を寄せていました。そのせいか私の不確かな英語にも、「君は英語で話している。私は日本語を話せないよ」と笑顔で対応して下さったことが今でも忘れられません。

Volpé教授は私がトロントを去る前にこんな言葉をくれました。

He who does nothing, gets nothing.

He who dares nothing, deserves

nothing.

行動を起こさない人は何も得ない。あえ

て何かをしようとしらない人は何物をも受けるに足らない。

40代の半ばを過ぎて、ようやくこの言葉の持つ真つ当さを理解できるようになりました。私は今、この言葉を自らの生き方の処世訓に据え、平常心の下で日々の仕事に精励しています。

人生のさまざまな局面で、私はここに述べた優れた師にめぐり会えたことに深く感謝しつつ、願わくば多くの若者たちに、多少なりとも良い影響を与えることができると密かに思っている昨今です。



研究室でのVolpé教授(中央)